様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３６２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１９３５

研究課題名（和文）スウェーデンにおける男性を対象とするドメスティック・バイオレンス対策

研究課題名（英文）Swedish initiatives tageting men against domestic violence

研究代表者
大山　治彦（Oyama, Haruhiko）

四国学院大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：７０３２１２３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　男性を対象とするドメスティック・バイオレンス（DV）対策において先進的であるスウェーデンの取り組みについて、「男性のための危機センター」等の調査により、明らかにした。DVの男性加害者／被害者のそれぞれに提供されている支援の概要や、その課題についての知見を得た。男女平等の推進の立場から、男性の危機の解決を目指すスウェーデンの取り組みは、わが国の男性問題の解決にも、大いに参考となるものであった。研究成果の公表については、学会の報告等を通じて行なった。

研究成果の概要（英文）：We researched on Swedish advanced initiatives targeting men against domestic violence through investigations of institutions and organizations such as "Crisis Centre for Men" . We gained findings on the service contents providing for both male assailants and victims of DV and on the problems to be solved in Swedish measures. From the standpoint of promoting gender equality, Swedish efforts to solve the crisis of men are also a great reference for solving the male gender problems in Japan. We made public our research results through reports in academic societies etc.

研究分野：ジェンダー学

キーワード：男性　男性性　ドメスティック・バイオレンス（DV）　男性のための危機センター　スウェーデン　エスニシティ　LGBT　ジェンダー政策

１．研究開始当初の背景

「第 3 次男女共同参画基本計画」（2010 年 12 月閣議決定）において、「男性・子ども」の分野（第 3 分野）が初めて設定され、男性の意識改革や男性相談・支援等の対策が展開しつつある。その中でも、男性を対象とするドメスティック・バイオレンス（DV）対策は、喫緊の政策課題といえる。

男性を対象とする DV 対策では、まず、予防啓発や、男性加害者への教育・更生プログラム等に注目が集まった。そして、近年は、男性被害者についても関心が高まってきている。しかしながら、わが国においては、相談・支援等を含め、男性を対象とする DV 対策の研究は、未だ十分に行われているとはいえない。

２．研究の目的

本研究の目的は、男性を対象とする DV 対策において先進的であるスウェーデンの取り組みの概要や、その課題等について、ジェンダー論（とりわけ男性学・男性性研究）の視点から、調査、分析を行い、わが国における男性を対象とする DV 対策に関する政策・施策・事業や、市民活動等への展開の可能性について、考察することである。

３．研究の方法

文献研究と調査研究を実施した。調査研究の概要は、次の通りであった。

1) ヨーテボリ市の機関である「男性のための危機センター」(「ウート・ヴェーク・男性」を含む）の施設職員への面接調査の実施と分析。2015（平成 27）年 9 月に実施。
2) ストックホルムにある NGO「男女平等をめざす男たち」の活動家への面接調査の実施と分析。2016（平成 28）年 8 月に実施。
3) 男性のための危機センターの全国組織である「スウェーデン・男性のための危機センター協会」の代表者への面接調査の実施と分析（イェーブレ）。2016（平成 28）年 8 月に実施。
4) 男性被害者も受け入れる「レイプ被害者緊急外来」（南総合病院内、ストックホルム）の医師、職員への面接調査の実施と分析。2016（平成 28）年 8 月に実施。なお、本調査は、当初の研究計画にはなかったもので、2015 年度の調査の中で、新たに浮上したものである。

４．研究成果

(1) 「男性のための危機センター」（「ウート・ヴェーク・男性」を含む）の調査では、公立の社会福祉施設として、男性加害者／被害者に対して提供している諸サービス（相談、非暴力グループ、父親グループ、宿泊施設等）の概要や課題等についての知見を得ることができた。男性加害者を家族から切り離すための宿泊施設は、特記すべきものであった。また、外国にルーツのある男性や HBT（LGBT）などのマイノリティ男性に対して、積極的にアプローチしていることも特徴的であった。さらに、男女平等を目指す立場から、男女平等の推進が男性たちにも変化を要求し、それに伴い男性に危機が生じることを予想し、その対応として当該施設を設置し、さまざまなサービスを提供していること、また、男性の加害者性をふまえた上で、現実の問題にある問題として、「男性自身が困っている」という意味での男性問題について、その解決に取り組んでいることは、わが国にとっても参考となるものであろう。

(2) NGO「男女平等をめざす男たち」の調査では、民間団体として、また、主にカウンセリングや短期の心理療法を提供する心理療法センターとしての活動の概要や課題等について、知見を得ることができた。しかし、当該 NGO の活動は効果があるようではあるが、依拠する心理学理論等が一般的でないため、わが国への導入については、慎重な検討が必要であろう。

(3) 「スウェーデン・男性のための危機センター協会」への調査では、スウェーデン全土で 30 か所（2016 年現在）を数える男性のための危機センターが共通して抱える問題等（行政との協働、資金獲得の困難さ等）について、知見を得ることができた。男性のための危機センターを結びつけることで、その活動を向上させる等の全国組織の必要性や、フェミニズムとの協力の重要性については、わが国においても、大いに参考となるものである。

(4) 「レイプ被害者緊急外来」への調査では、医療機関として提供している、レイプの男性被害者に対する緊急的な医療的なケア等の概要や、その課題等について、知見を得ることができた。レイプについて、男性もまた心身に傷を受け、支援を必要としていることに着目し、365 日 24 時間体制で、危機に直面している被害者を受け入れ、救急治療とケア、そして、その後のフォローアップを総合的に提供していることは、わが国においても、大いに参考となるものであろう。

(5) 今後の課題は、上記の成果をふまえ、さらに DV 対策の研究を中心に、男性を対象とするジェンダー平等政策に関する研究を深化させていくことである。そのために、本研究では、実現できなかった男性加害者／被害者に対する聞き取り調査等を実施したい。なお、本研究の成果は、「（仮）男性危機-国際社会の男性政策に学ぶ-」として出版される予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6 件）

① 大東貢生・木脇那智子・新矢昌昭・富川拓．「日本における男女共同参画社会の展開（1）-A 市における女性の働きやすさ調査から-」，『佛教大学社会学部論集』（61），2015，77-85．査読無．

② 伊藤公雄．「男女共同参画の視点から見た日本の学術・教育-ジェンダー統計の公開の拡充に向けて-」，日本学術協力財団『学術の動向』10 月号，2016，20-25 頁．査読無．

③ 大東貢生・木脇那智子・新矢昌昭・富川拓．「日本における男女共同参画社会の展開（2）-A 市における意識調査の分析から-」，『佛教大学社会学部論集』(63)，2016，37-54．査読無．

④ 大東貢生・木脇那智子・新矢昌昭・富川拓．「日本における男女共同参画社会の展開（3）-A 市における事業所調査の分析から-」，『佛教大学社会学部論集』(64)，2017，67-82．査読無．

⑤ 伊藤公雄．「男子の学力低下をめぐって」，日本学術協力財団『学術の動向』，10 月号，2017．34-38 頁．

⑥ 大東貢生．「女性活躍推進政策の展開と課題」，『佛教大学総合研究所紀要』（23），2016，31-45．査読無．

〔学会発表〕（計 14 件）

① TAGA, Futoshi．“Discussion: What can Japan learn from experiences in welfare-advanced countries to achieve gender equality in parenting?”．International Session: Work-Family Balance of Families with Small Children: How to Achieve Gender Equality in Parenting. 25th Annual Meeting of the Japan Society of Family Sociology. September 5, 2015, Otemon Gakuin University.

② 多賀太，「父親の子育て参加と親密性の変容－男性学の視点から」．日本心理学会大会第 79 回大会 公募シンポジウム 102「ジェンダーとセクシュアリティ研究の多様性２：ケアの諸相を契機として」．2015 年 9 月 24 日．名古屋国際会議場．

③ ITO, Kimio．“Changing Intimate & Public Spheres: Gender, Aging and Care”，Bristol- Heidelberg- Kyoto Symposium: Gender in Popular Culture, Intimacy in the Public Spheres. November 5, 2015. Bristol University.

④ ITO, Kimio．““Masculinization” of “Deprivation” ~Japanese Post-war Family-gender Policies and Men” in CHANGING CARE DIAMONDS IN EUROPE AND ASIA:ASIANIZATION OF EUROPE AND EUROPEANIZATION OF ASIA“．Final conference of the Ile-de-France. Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales．September 22-23, 2016.

⑤ ITO, Kimio．“Boys’ “Military Culture” in the Modern & Contemporary Japan- Changing Image of “Violence“ and “Death” ”．Intellectual Exchange Program between Japan and Europe in Alsace Japanese Study Seminar：Women and Men. Centre European d’Etudes Japanaises d’Alsace. September 26-27, 2016.

⑥ 大山治彦，「男性のための危機センターについて　－スウェーデンの男性政策・DV 対策－」，関西家族社会学研究会，2016 年 4 月 23 日，甲南大学．

⑦ ITO, Kimio．“Image of “Enemy” in Japanese Boys’ Culture” Bristol-Kyoto Workshop：Deterritorialising Visual Theory and Culture: Anglo-Japanese Encounters School of Geography, University of Bristol. July 26-27, 2016.

⑧ TAGA, Futoshi．“Father as an Educator: Family strategy for the education of children in Japan”．Extra seminar on Masculinity studies in combination with Allmänna seminariet, University of Gothenburg, Sweden. August 24, 2016.

⑨ OYAMA, Haruhiko．““Menzuribu”: A history of Men's movement in Japan 1970's-1990's”，Extra seminar on Masculinity studies in combination with Allmänna seminariet, University of Gothenburg, Sweden. August 24, 2016.

⑩ 大山治彦・大東貢生・多賀太・伊藤公雄，2016，「スウェーデンにおける『男性のための危機センター』による男性支援―DV 対策における男性へのアプローチ」第 89 回日本社会学会大会，2016 年 10 月 8 日，九州大学．

⑪ 大山治彦．「スウェーデンにおけるジェンダー問題への取り組み -男性問題を中心に」，関西家族社会学研究会，2017 年 5 月 20 日，甲南大学．

⑫ ITO, Kimio．“ Violence against Women in Japan--- From the Viewpoint of Men & Masculinity Studies”．2nd International Conference. June 14-16, 2017. University of Jyväskylä, Finland.

⑬ 大山治彦・大東貢生・多賀太・伊藤公雄．「スウェーデンにおける『男性のための危機センター』による男性支援―DV 対策における男性へのアプローチ」．第 90 回日本社会学会大会．2017 年 11 月 4 日．東京大学．

〔図書〕（計 6 件）

① 伊藤公雄．岩波講座『日本歴史　第 19 巻・近現代 5』（担当部分　「メデイア社会・消費社会とポピュラーカルチャー―戦争と暴力のイメージを中心に」）．岩波書店．314 頁．287-314 頁．2015．

② 多賀太・伊藤公雄・安藤哲也．　『男性の非暴力宣言』．　岩波書店．　全 80 頁．2015．

③ 伊藤公雄・牟田和恵（編）．『ジェンダーで学ぶ社会学（全訂新版）』．世界思想社．全 264 頁．2015．

④ 伊藤公雄・山中浩司編，『とまどう男たち生き方編』，大阪大学出版会，全 280 頁，2016．

⑤ 多賀太．『男子問題の時代？―錯綜するジェンダーと教育のポリティクス』．学文社．全 240 頁．2016．

⑥ 伊藤公雄・本田由紀編．『なぜ国家が家族に介入するのか』．青弓社．2017．全 172 頁．

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

なし

○取得状況（計　0　件）

なし

〔その他〕

・一般掲載物

① 大山治彦．「スウェーデンレポート　男性のための危機センター」，　『季刊セクシュアリティ』79 号，エイデル研究所，2017，120-124 頁．

② 大山治彦．「スウェーデンレポート　レイプされた男性のための緊急外来」，　『季刊セクシュアリティ』81 号，エイデル研究所，2017，154-157 頁．

６．研究組織

(1) 研究代表者

大山　治彦（OYAMA, Haruhiko）
四国学院大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：70321239

(2) 研究分担者

伊藤　公雄（ITO, Kimio）
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号： 00159865

多賀　太（TAGA, Futoshi）
関西大学・文学部・教授
研究者番号： 702844615

大東　貢生（OTSUKA, Takao）
佛教大学・社会学部・准教授
研究者番号： 20351306

(3) 連携研究者

中澤　智惠（NAKAZAWA, Chie）
東京学芸大学・教育学部・個人研究員
研究者番号：00272625

(4) 研究協力者

ラッシュ・ヤルマート（JARMERT, Lars）
ストックホルム大学教育学部・名誉教授

以上